

日本英文学会九州支部第 74 回大会

期日 2021 年（令和 3 年）
10 月 16 日（土）・17 日（日）

オンライン（リアルタイム）開催

お知らせ

2020 年度に引き続き 2021 年度も西南学院大学に支部大会開催のご準備をいただいておりますが、新型コロナウイルスの感染拡大のため本年度は Zoom を用いたオンライン開催といたします。参加ご希望の方は、9 月 19 日（日）以降、<https://docs.google.com/forms/d/1VQXuW-gKH-spghXox4zZuFokYqsGJwBZY3ysbh1fiw/viewform?>までアクセスして、ご氏名、メールアドレスを明記の上、お申し込み下さい。接続先 URL をメールでお送りします（接続先は、他の方にお教えにならないで下さい）。多数のご参加をお待ちしております。

参加申込み先 QR コード



日本英文学会九州支部

〒819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院人文科学研究院

鶴飼信光研究室内

TEL (092) 802-5011

E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com

HP: <http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2021-22 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覽

鵜飼 信光 (九州大学)
大島 由起子 (福岡大学)
大津 隆広 (九州大学)
大橋 浩 (九州大学)
木下 善貞 (北九州市立大学名誉教授、福岡女学院大学)
後藤 美映 (福岡教育大学)
小林 潤司 (鹿児島国際大学)
高野 泰志 (九州大学)
高橋 勤 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学)
西岡 宣明 (九州大学)
虹林 慶 (熊本県立大学)
早瀬 博範 (佐賀大学)
福田 稔 (宮崎公立大学)
山田 英二 (福岡大学)

2021 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覽

支部長・日本英文学会理事	鵜飼 信光
副支部長・日本英文学会評議員	西岡 宣明
『九州英文学研究』編集委員長	松元 浩一
事務局長	高野 泰志
書記	大谷 英理果
書記	林 慎将
書記	田中 優子
書記	隈部 歩
書記	田島 健太郎
書記	田中 恵理
書記	浜本 裕美
書記	原田 洋海

大会日程

10月16日(土)

開会式 (13時10分)

研究発表 (①13時30分 ②14時10分)

第1室 (イギリス文学)

第2室 (アメリカ文学)

第3室 (英語学)

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門 (イギリス文学)

第2部門 (アメリカ文学)

第3部門 (英語学)

懇親会は今年度は開催いたしません。

10月17日(日)

研究発表 (①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第1室 (イギリス文学)

第2室 (アメリカ文学)

第3室 (英語学)

第4室 (英語学)

特別講演 (14時00分)

閉会式 (15時30分)

日本英文学会九州支部第74回大会プログラム

日時：2021年10月16日（土）・17日（日）
オンライン（リアルタイム）による開催

第1日 10月16日（土）

開会式 13時10分より

開会の辞	司会・副支部長・九州大学教授	西岡 宣明
事務局報告	支部長・九州大学教授	鶴飼 信光
優秀論文賞等選考報告	事務局長・九州大学准教授	高野 泰志
	編集委員長・長崎大学教授	松元 浩一

研究発表（①13時30分 ②14時10分）

第1室

- 司会 福岡大学准教授 福原 俊平
1. An Unsuccessful Power Grab: Inheritance of Feminine Invalidism and Rebellion of “Sick” Women in *Wuthering Heights*
九州大学大学院修士課程 Yin Yimeng
-

【招待発表】

- 司会 福岡女子大学教授 宮川 美佐子
2. ジョン・バンヴィルの演劇のメタファー——*Ghosts* から *The Sea* へ
西南学院大学教授 加藤 洋介
-

第2室

1. 【発表なし】
-

- 司会 琉球大学准教授 小林 正臣
2. 身体なき読み手——Paul Auster, *Ghosts* にみるアイデンティティの解体
九州大学大学院修士課程 新名主 優子
-

第3室

- 司会 西南学院大学准教授 前田 雅子
1. 主要部—主要部構造のラベル付けに関して
九州大学大学院博士課程 川満 潤
 2. 簡素化左周辺部再考——焦点化、V2現象の観点から
九州大学助教 大塚 知昇
-

シンポジウム (15時～17時30分)

第1部門「イギリス文学」

演劇とインターテクスチュアリティ～シェイクスピア・地図・予言・ジェンダー・歴史書～

司会・講師	九州大学准教授	大島	久雄
講師	同志社大学教授	勝山	貴之
講師	鹿児島国際大学教授	小林	潤司
講師	九州国際大学准教授	國崎	倫

第2部門「アメリカ文学」

都市と連帯——文学的ニューヨークの探求

司会・講師	西南学院大学教授	藤野	功一
講師	熊本大学准教授	永尾	悟
講師	立教大学教授	舌津	智之
講師	大阪大学講師	岡本	太助

第3部門「英語学」

(非) 名詞句主語へのアプローチ

司会・講師	長崎大学教授	廣江	顕
講師	福岡大学講師	武内	梓朗
講師	長崎大学准教授	谷川	晋一
講師	福岡大学教授	古賀	恵介

懇親会は今年度は開催しません

第2日 10月17日(日)

研究発表 (①10時 ②10時40分 ③11時20分 ④12時 ⑤12時40分)

第1室

【招待発表】

1. 『ヴェニス商人』におけるポーシャの教養

司会 福岡大学教授 鶴田 学

志學館大学講師 高根 広大

2. *A Tale of Two Cities* における特派員の語り——語り手と *Alexandre Manette* の手記について

司会 熊本県立大学准教授 田中 和也

就実大学講師 原田 昂

3. *Great Expectations* におけるピップの語り——隠された暴力性と無意識の自己編纂

九州大学大学院修士課程 横井 翔馬

4. 【発表なし】

5. 【発表なし】

第2室

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

3. 【発表なし】

【招待発表】

4. Capote 著 *Summer Crossing* の素材と主題——Capote の諸作品との関係を手がかりとして
司会 九州大学教授 高橋 勤
九州国際大学教授 大園 弘

5. 【発表なし】

第3室

1. 音節構造と母音持続時間——英語の2音節語の場合
司会 琉球大学教授 石原 昌英
福岡大学大学院修士課程 石橋 頌仁

2. ヒーローと悪役の名称比較——*Marvel Comics* のキャラクター名における音象徴
福岡大学大学院修士課程 神谷 祥之介

3. 主語 wh 疑問文の派生再考
司会 宮崎公立大学教授 福田 稔
九州大学大学院修士課程 末永 広大

4. Split Minimal Search
九州大学大学院博士課程 森竹 希望

5. 【発表なし】

第4室

1. ラベリング分析における動詞句の派生
司会 産業医科大学准教授 田中 公介
九州大学大学院修士課程 宮元 創

2. 英語の二次述語構造のラベリングについて
司会 九州共立大学准教授 黒木 隆善
九州大学大学院博士課程 久保田 舞

-
- 司会 長崎大学教授 廣江 顕
3. 概念構造からの anaphor と logophor への統一的アプローチの試み——文と文断片の *self* 代名詞

長崎総合科学大学講師 永次 健人

- 司会 西南学院大学教授 藤本 滋之
4. 英語の Negative Concord に関する研究——標準英語・非標準英語における NC/DC の統語構造の解明

九州大学大学院修士課程 崎向 悠太

【招待発表】

5. 素性浸透アルゴリズムの意義と展開

福岡工業大学教授 宗正 佳啓

特別講演 14 時 00 分より

作家 沼田 真佑

「孤立と連帯」

司会・聞き手 西南学院大学教授 藤野 功一
聞き手 西南学院大学教授 ユスチナ・W・カシャ

閉会式 15 時 30 分より

挨拶

副支部長・九州大学教授 西岡 宣明

〈第1日〉10月16日(土)
研究発表

第1室

司会 福岡大学准教授 福原 俊平

1. An Unsuccessful Power Grab:
Inheritance of Feminine Invalidism and Rebellion of “Sick” Women in
Wuthering Heights

九州大学大学院修士課程 Yin Yimeng

As Emily Brontë’s only novel, *Wuthering Heights* (1847) brims with “sick” women who suffer from genuine illness or feigned illness. They extract sympathy or acquire limited power by “illness,” in order to rationalize their demands which are refused by the authorities in the family.

In summary, this presentation tries to analyze *Wuthering Heights* from a feminist perspective. Through an analysis of the inheritance of feminine invalidism in a relationship between symbolic mother and daughter, we will see the succession of feminine temperament between women in the novel. Moreover, this presentation reveals the implications of food refusal and madness among women, aiming at finding out the shifts of power, especially gendered power relations, caused by women’s “illnesses” in the domestic sphere. An expected conclusion is that “illness” helps women gain success in challenging the patriarchal power temporarily, but because of the contradictory characteristics of feminine invalidism, grabbing power by “illness” is doomed to failure.

【招待発表】

司会 福岡女子大学教授 宮川 美佐子

2. ジョン・バンヴィルの演劇のメタファー——*Ghosts* から *The Sea* へ

西南学院大学大学教授 加藤 洋介

ジョン・バンヴィルの1993年の小説 *Ghosts* は、鏡、窓、海、反響部屋、監獄など彼の近年の小説の主要イメージをとり込んでおり、彼の文学世界全体の解釈にとって重要な意味をもつ。いわゆる彼の美術三部作の一冊であり、美術批評家が主要人物の1人として登場するが、演劇の要素も、たとえば物語の冒頭がシェイクスピアの *The Tempest* のパロディであるように、明らかに認められる。バンヴィルは *Ghosts* のあとに役者のアレクサンダー・クリーヴを語り手として設定した一連の作品を創作し、演劇の視点とメタファーをとり込んだが、それらに先行して *Ghosts* で演劇のメタファーをつかった。そこで本発表では、*Ghosts* における演劇のメタファーを論じることで、彼の近年の文学世界の構造を明らかにすることを試みる。鏡や反響部屋や監獄のイメージと、作品のなかで構築される演劇空間の関係に注目し、バンヴィルの主要イメージについてそれぞれ有効な解釈の視点を提示したい。

第 2 室

1. 【発表なし】

司会 琉球大学准教授 小林 正臣

2. 身体なき読み手——Paul Auster, *Ghosts* にみるアイデンティティの解体

九州大学大学院修士課程 新名主 優子

Paul Auster, *Ghosts* (1986)では、色が人名に当てはめられ、その登場人物が物語を展開していく。また、その人名は地名の現実的な設定を虚構化していく。現実世界の私たちは名前とその身体との間に強固なつながりを持たせ、そこにアイデンティティを見出すが、本作ではその設定によって、名付けるという行為の虚しさが強調される。本論では *Ghosts* をメタフィクショナルに読書行為を描いた作品であると位置付け、Auster が「書く」という行為をどのように捉えているのか、そしてその対称にある「読む」という行為がどのように読み手のアイデンティティを混乱させていくのかを紐解く。その上で、日常的な、身体性と結びつけられたアイデンティティの在り方と、読み手として作品に没入している間の、身体性から解放された個人のアイデンティティの在り方を対比する。また、この 2 通りのアイデンティティの在り方に介在する行為として「名付け」を位置付ける。

第 3 室

司会 西南学院大学准教授 前田 雅子

1. 主要部—主要部構造のラベル付けに関して

九州大学大学院博士課程 川満 潤

本発表では、Chomsky (2013, 2015)で提案されたラベル付けアルゴリズムの枠組みに基づき、ある集合が、主要部(H)—主要部(H)構造を形成した場合のラベルに関して議論し、XP-YP 構造の場合と同様に、ラベル付けの失敗を引き起こすと主張する。数量詞遊離文や前置文のような移動を伴う文において、ある要素を残留させる場合に、該当の H-H 構造が生じると考えられる。

- (1)
 - a. *The students arrived all.
 - b. *The students were arrested all.
 - c. *Mary hates the students all.

(Bošković (2004: 682))

- (2)
 - a. Nobody had expected that the FBA would assassinate the king of Ruritania.
 - b. *King of Ruritania, nobody had expected that the FBA would assassinate the.
 - c. The king of Ruritania, nobody had expected that FBA would assassinate.
 - d. *The FBA would assassinate the king of Ruritania, nobody had expected that.

e. That FBA would assassinate the king of Ruritania, nobody had expected.

(Radford (2020: 87))

数量詞遊離現象に関して、Bošković (2004)が、数量詞は θ 位置で遊離できないという一般化を主張した。従って、非対格動詞や受動文の目的語位置、または、他動詞の目的語位置における数量詞遊離は容認されないように思われる。また、前置文に関して、残留する要素によって文法性が変化するという事実が良く知られている。これらの記述一般化や言語事実に対して、本発表では、ラベル付けアルゴリズム分析に基づき、理論的な説明を与える。

2. 簡素化左周辺部再考——焦点化、V2現象の観点から

九州大学助教 大塚 知昇

本研究は、大塚 (2020)において提案した、「簡素化左周辺部」と「マッピング一般化」に基づく枠組みのさらなる可能性を探ることを目標とする。具体的には、大塚 (2020)の議論は CP フェイズに関するものに限られていたが、どのフェイズ主要部が F 素性を有するかは言語によって (レキシコンレベルで)決まっていると想定し、これにより動詞句左周辺部に関する言語間の多様性を説明することができると主張する。具体的には、簡素化左周辺部の枠組みのもと、F 素性を C 主要部のみならず v^* 主要部にも拡張することで、一部の言語で動詞句左周辺部における焦点化、さらに動詞句内 V2 現象の存在が予測され、これが経験的に裏付けられることを見ることで、本研究の提案の妥当性と本研究のさらなる可能性を示すものである。

シンポジウム

第1部門「イギリス文学」

演劇とインターテクスチュアリティ～シェイクスピア・地図・予言・ジェンダー・歴史書～

司会・講師	九州大学准教授	大島 久雄
講師	同志社大学教授	勝山 貴之
講師	鹿児島国際大学教授	小林 潤司
講師	九州国際大学准教授	國崎 倫

シェイクスピアも含め劇作家は、時代や社会に流布する言説との関係性の中で劇作を行い、変化する言説環境の中で作品は受容されていく。20世紀後半に誕生して以来、多様な発展を遂げて現代批評理論の重要な一部となった「インターテクスチュアリティ」は、劇作品創作・受容と言説環境の関わりを明らかにする有効な批評概念として注目されている。デジタル・ネットワーク技術の進歩により入手困難な歴史的文献に

簡単にアクセスできるようになり、シェイクスピアを取り巻く言説環境に関する研究も顕著な進展を示している。本シンポジウムはこのような作品言説環境研究の近年の成果に注目し、インターテクスチュアリティの観点から地図・予言・ジェンダー・歴史書を取り上げて各関連言説とシェイクスピア劇の濃密で豊かな関係性を明らかにし、討論ではフロアの方々からもコメント等を頂戴しながらインターテクスチュアリティ研究の可能性を具体的に検証したい。

「シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』のジェームズ朝的インターテクスチュアリティ」

大島 久雄

1603年にエリザベス女王が亡くなり、スコットランドから迎えた新国王ジェームズにより国王一座付劇作家となったシェイクスピアは、以前も歴史劇執筆においてしばしば材源としていた『ホリンシェッド年代記』に向かった。波乱に満ちた王朝交代期に『リア王』・『マクベス』においてシェイクスピアがこの大著に向かった理由は何であろうか。劇37作中13作で材源となった『ホリンシェッド年代記』は、Holinshed Project (<http://english.nsms.ox.ac.uk/holinshed/>)により1577年版・1587年版ともにオンライン参照が可能となり、その歴史学的・文化史的価値が大きく再評価されている。本発表は、期待や不安に満ちた時代の変わり目の言説環境における両悲劇の政治性に注目しながら、シェイクスピアと『ホリンシェッド年代記』とのジェームズ朝的インターテクスチュアリティを明らかにしたい。

John Speed の大英帝国地図と *Cymbeline*

勝山 貴之

地図はありのままの地形を、科学的にまた客観的に描き出したものと考えられがちである。しかし、ともすれば時代精神とは無関係と思われる地図も、それぞれの時代の政治的・経済的なイデオロギーの束縛や影響を受けて制作されている。1604年、EnglandとScotland両国の王座についたJamesは、新王国の名称として古称Britainを冠することを定めた。この新たな時代に向けて国威発揚を目的として製作されたのが、John Speedの手になる大英帝国地図*Theatre of the Empire of Great Britaine* (1608)である。今回の発表では、この大地図を繙きながら、そこに描かれたWalesの地図について考えてみることにする。当時の人々にとって、果たしてWalesは如何なる政治的・文化的意味を持つものであったのか。地図解釈を端緒に、作品*Cymbeline* (1608-09)を再解釈してみたい。

予言のテキストとサブテキスト——『マクベス』におけるインターテクスチュアリティ

小林 潤司

「女から生まれた者は誰もマクベスに危害を加えぬ」という予言によって天下無双

を保証されていたはずのマクベスは、「切り裂かれた母の子宮から時ならずして引き出された」マクダフに打ち負かされる。「帝王切開によって生まれた者は女から生まれたことにはならない」という、この一見不可解な論法を、『ハムレット』の墓掘りの場というサブテキストを参照して合理化する従来の読みは十分に説得的だが、この解釈を受け入れたとしても、「およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった」（「マタイによる福音書」11章11節）をサブテキストとして萌していた、（女からではなく処女から生まれた）救世主降臨への期待は「裏切られた」と言い切れるものだろうか？ この問いを足がかりに、現実世界のロジックでは必ずしも割り切れない、戯曲テキストのインターテクスチュアリティのありようについて考えてみたい。

シェイクスピアとジェンダーバイアス

國崎 倫

「おじいさんは山へ芝刈りに、おばあさんは川へ洗濯に」一性をもとにするステレオタイプは物語を媒介として無意識のうちに入り込んでくる。

寡黙・従順・貞節を女性に求める家父長制を背景に、ジェンダーバイアスフリーの実現に挑んだ女性はずでに実在していた。作品中、ジュリエットやケイト、ポーシャなどにも条件付きで試みが許されているが、上演時の興行収入など社会からのフィードバックを考慮すると、劇中の彼女たちの着地点は、それほど自由というわけにもいかない。なにかしらの代償を伴うのである。

社会を映す印刷物や物語の役目とは何か。印刷物から透けて見えるジェンダー観と、ステレオタイプに縛られない表象について、『ロミオとジュリエット』を中心に材源との比較を行いながら、インターテクスチュアリティの観点より考えてみたい。

第2部門「アメリカ文学」

都市と連帯——文学的ニューヨークの探求

司会・講師	西南学院大学教授	藤野 功一
講師	熊本大学准教授	永尾 悟
講師	立教大学教授	舌津 智之
講師	大阪大学講師	岡本 太助

都市において、連帯は可能だろうか。ここ一世紀の間に、ベンヤミン、バーバ、ハートとネグリといった論客たちが、都市化する世界における人々の社会的連帯の可能性を論じてきた。だが同時に、現実を見てみれば、100年前と変わらず、いまだに都市とは、見ず知らずの他人同士が集まり、劣悪な住環境に押し込められ、激しい競争の中、貧富の差が開くばかりの場所でもある。2020年初頭から爆発的に広まった新型ウイルスも、人々の分断の現実をさらに深刻にしてしまった。

こうした理論上の議論と現実との乖離を前提にしながら、このシンポジウムでは、

アメリカの大都市、ことにニューヨークにおける連帯の試みと破局の歴史がどのように文学に表象されてきたかを再検証すべく、アンダーソンの「孤独」、カウリーの『亡命者の帰還』、ボールドウィンの『山にのぼりて告げよ』、カポーティの『ティファニーで朝食を』、そして1980年代のエイズ禍とニューヨーク演劇界を取り上げる。人間はどうあれ、自分達の生きた場所と時間に縛られているものだという認識を前提にしつつ、20世紀ニューヨークでは、人々がどのような状況の中に置かれてきたか、そしてどのようにつながりを見出そうとしてきたか（あるいは失ってきたか）を議論してみたい。

連帯の幻想と孤独の現実

——アンダーソンが予言し、カウリーが検証した1920年代のニューヨーク

藤野 功一

野心を抱いてニューヨークにやってきた個人（ことに芸術家、作家）は、いつか都会に生きる人々との交流を楽しむものの、結局は、信頼するに足る連帯を失って孤独へと陥る運命をたどる。このような、ニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実にまつわる文学的イメージは、1919年にシャーウッド・アンダーソンの短編「孤独」によって予言的に描かれて以来、1920年代のフィッツジェラルド、ヘミングウェイ、フォークナーといったモダニズム作家たちの代表作におけるニューヨークの描写によっても補強されてきた。だが、これらの作家たちはいずれも、マンハッタンを中心としたニューヨークの世界を、外側から冷ややかに見る立場で描いている。

果たして、1920年代をニューヨークの内側で過ごした人々は、実際にどのような連帯を経験し、そして連帯を失ったとすれば、どのように失ったのだろうか。この発表では、マンハッタンで作家志望者として1920年代を過ごし、文学的ニューヨークの実態をつぶさに眺めてきたマルカム・カウリーの『亡命者帰る——「失われた世代」の文学遍歴』（1951）に拠り、ニューヨークにおける連帯の幻想と孤独の現実が、どのようなものであったかを論じる。

「時間の外にある都市」

——『山にのぼりて告げよ』におけるハーレムと教会

永尾 悟

ジェイムズ・ボールドウィンの『山にのぼりて告げよ』（1953）は、ニューヨークの喧騒を遮断するハーレムの店頭教会を舞台にして、黒人少年の宗教的覚醒と彼の親たちの過去の回想が描かれる。この作品における1930年代のハーレムは、かつてジェイムズ・ウェルドン・ジョンソンが「都市の中の都市（a city within a city）」として理想化した黒人文化の国際的拠点ではなく、南部から逃れた黒人たちが寄り集まった「村」である。14歳の主人公ジョン・グライムズは、マンハッタンの街路を遊歩する未来を思い描くものの、そこには危険と誘惑が潜むという継父の教えに従い、教会の壁の内側で得られる法悦を「時間の外にある都市（a city out of time）」だと考える。ボールドウィンは、黒人として生まれた自らを「西洋の私生児」と呼び、シャルトルの大聖堂

やニューヨークのエンパイア・ステート・ビルといった都市のランドマークを持つ文化的象徴性や公共性を共有しえないと述べる。よって彼の作品の多くは、敵対的な都市の中で個人や家族の親密な関係に拠り所を求める人物を描くのだが、『山にのぼりて告げよ』における教会と家族の連帯は、都市の安全な避難所となりうるのかについて考えたい。

ニューヨークとサザン・ホスピタリティ ——『ティファニーで朝食を』にみる歓待の親密圏

舌津 智之

アラバマを舞台にしたトルーマン・カポーティの短編「感謝祭のお客」を論じるマイケル・ビブラーは、作品中に織り込まれた『欲望という名の電車』のエコーを指摘して、他人の親切にすぎるといふモチーフを、他人に親切を施すというモードに書き換えたカポーティの想像力が、同性愛を排除しないサザン・ホスピタリティのリベラルな可能性をあぶり出すと説いている。この文脈において、『ティファニーで朝食を』のホリーが借りていた部屋へ新たに入居する住人が、彼女と同様——そして『ガラスの動物園』のアマンダと同様——数多くの「紳士の訪問客」をもてなすのは偶然であろうか。ホリーが南米へと旅立つ一九四五年の初春は、『ガラスの動物園』がニューヨーク初演を迎えた時期と一致する。本発表では、ウィリアムズの戯曲とカポーティの小説をつなぐ間テクスト的な細部を精読しつつ、後者をニューヨークに転移された南部小説と捉え、複数の訪問者を同時に歓待する文化が、今日的なポリアモリー概念へと連続していることを検証したい。

分断の時代の連帯——アメリカ演劇における逆説

岡本 太助

2021年夏になり状況改善の兆しが見られるものの、ブロードウェイでは公演中止や延期が長く続いている。新型コロナウイルス対策としての社会的距離拡大は、他者との物理的なつながりを意識的に断ち切ることを是とするものであるが、それはまた心理的距離拡大と呼ぶべき事態を引き起こしてもいる。目に見えないものに対する不安や感染することへの怖れが、現代の都市に孤独な群集の亡霊を呼び覚ましていよう。

本発表では、1980年代のエイズ禍が演劇におよぼした影響とそれに対する演劇界の反応を振り返ることで、Tony Kushnerの*Angels in America*の終幕において幻視される“weird interconnectedness”の意味を再考する。「連帯」を生み出す文化装置としての演劇は、望まざる「感染」のリスクをも内包するのであり、同様に社会に生きる我々は、他者とつながることに怯えながらもつながらずにはいられない。演劇と共同体にまつわるそれらの逆説を読み解く中で、分断の時代における連帯の可能性を探ってみたい。

第3部門「英語学」

英語学部門シンポジウム (非)名詞句主語へのアプローチ

司会・講師	長崎大学教授	廣江 頌
講師	福岡大学講師	武内 梓朗
講師	長崎大学准教授	谷川 晋一
講師	福岡大学教授	古賀 恵介

本シンポジウムでは、英語において、(非)名詞句主語あるいは(非)名詞句主語を伴う文構造に対し、どのようなアプローチが可能か、またどのようなアプローチが正しくその構造的・意味的特性を捉えうるのかを考察する。

武内講師は、(非)名詞句主語の一例である動名詞句主語を取り上げ、動名詞句主語が担う原因という意味役割の性質を、特定の機能範疇と項構造の相互作用から導き出す試みを行う。

谷川講師は、文主語構文と場所句倒置構文を扱い、通常の名詞句と同様、文要素と前置詞句もT指定部に位置していると考えれば、ラベル理論を用いてその現象をどのように捉えることができるかを考察する。

古賀講師は、英語の *there* 構文を認知言語学の観点から、*there* 構文は主語の非主題性を明示化している特殊構文であるという捉え方をすれば、変種構文も含めて、その文法的特徴を説明することができるとの主張を行う。

廣江講師は、これまで副詞句あるいは副詞節は、間接疑問文の場合を除き、主語になれないと考えられてきたが、それには反例があることを指摘する。次に、廣江(2021)で提示した反例の統語的・意味的特徴を理論的に考察し、稲田(2005)及び Jackendoff (1997, 2005)で提唱されている「三部門並列モデル」に位置付ける試みを行う。

動名詞句主語と原因という意味役割

武内 梓朗

本発表は、非名詞句主語の(可能な)一例として原因 (causer) という意味役割を担う動名詞句主語を取り上げる。具体的には、*Interviewing Nixon gave Mailer a book* のような文における動名詞句である。このような原因を表す動名詞句主語の分析を通して、原因という意味役割の性質の解明を試みる。

原因という意味役割は、補部が *eventive* な事象を指示する文の主語が担うだけでなく、補部が *stative* な事象を指示する文の主語も担うものでもある (e.g. *This whole thing has me so rattled*)。補部が *eventive* の場合であれ *stative* の場合であれ、主語項が原因という意味役割を担うという事実は、原因という意味役割が他の意味役割と質的に異なることを示している。

原因が他の意味役割と質的に異なっていることは、以前から指摘されている (e.g. Alexiadou and Schäfer (2006), Alexiadou et al. (2015), Levin and Rappaport Hovav (1995: 83-4), Pylkkänen (2008: 93), Schäfer (2012), Solstad (2009))。例えば、Solstad (2009)は概略、

「原因項は原因項とは独立して動詞句が導入する使役事象を修飾する働きを持っているにすぎない」と述べている。

可能であれば、外項を導入する機能範疇の Voice (Kratzer (1996))が示す contextual alloosemy (Wood (2015, 2016))についても本発表の観点から言及し、先行研究の見解を上書きしたい。

主要参考文献

- Alexiadou, Artemis, Elena Anagnostopoulou, and Florian Schäfer (2015) *External Arguments in Transitivity Alternations: A Layering Approach*, Oxford University Press, Oxford.
- Kratzer, Angelika (1996) “Severing the External Argument from Its Verb,” In *Phrase Structure and the Lexicon*, ed. by Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109–137, Kluwer, Dordrecht.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Schäfer, Florian (2012) “Two Types of External Argument Licensing – The Case of Causers,” *Studia Linguistica* 66, 128-180, <https://doi.org/10.1111/j.1467-9582.2012.01192.x>.
- Solstad, Torgrim (2009) “On the Implicitness of Arguments in Event Passives,” *Proceedings of NELS* 38, 365-374.

ラベル理論から見る主節現象：文主語・場所句と C/T の併合

谷川 晋一

本発表は、非名詞句主語に関わる現象であり、主節現象と捉えられる、英語の文主語構文と場所句倒置構文に焦点を当てる。Chomsky (2013, 2015) の “Problems of Projection” で提唱されたラベル理論を用いて、規範的には名詞句主語が占める T 指定部に文要素と前置詞句が位置すると捉えられる現象を、生成統語理論上どのように捉えることができるかについて考察を行う。

筆者は、拙稿 Tanigawa (2018, 2019) 等において、これまでもラベル理論を用いて当該現象の研究を行ってきたが、すべての統語項目はラベル付けされなければならないという前提に立ったものであった。この前提のもと、当該構文で形成される {XP, TP} では、話題素性の継承及び共有の結果、適切なラベル付けがなされるという分析を提示した。しかしながら、「統語項目の中にはラベル付けされないものもある」といったように、ラベル付けの厳密性について、上の前提とは異なる提案がなされているのも事実である。

本発表では、Blümel and Goto (2020) が提案する「主節現象の根はラベル付けされない」という主旨の Root Exocentricity を援用し、これまでとは異なる前提と観点から当該現象の分析を行いたい。具体的には、Epstein, Kitahara and Seely (2016) が提案する主要部の外的対併合が C と T にも適用されると仮定し、文主語構文と場所句倒置構文では、外的対併合した <T, C> 及び <C, T> を主要部とする統語項目に、文要素・前置詞句である XP が併合すると主張する。そして、当該構文の派生で形成される {XP, {<T, C>, vP}} 及び {XP, {<C, T>, vP}} では、素性共有が起こらず、ラベルが付与されないため、主節現象としての資格が得られると主張する。また、当該構文には、主節現象性に加えて、動詞の一致等で特異な特性が見られるが、ここで提案する分析を用いることで、それらを生成統語理論上どのように説明できるかについても議論を行う。

主要参考文献

Blümel, Andreas and Nobu Goto (2020) “Head Hiding,” *Proceedings of NELS* 50, 49–58.

Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33–49.

Chomsky, Noam (2015) “Problems of Projection: Extensions,” *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann and Simona Matteini, 3–16, John Benjamins, Amsterdam.

Epstein, Samuel D., Hisatsugu Kitahara and T. Daniel Seely (2016) “Phase Cancellation by External Pair-Merge of Heads,” *The Linguistic Review* 33, 87–102.

There 構文の拡がり

古賀 恵介

本発表では、英語の非名詞句主語の一種として、**There** 構文を認知言語学的な観点から取り上げ、以下のように分析する。

There 構文は、英語の標準的な主語位置を虚辞化することによりその非主題性を明示化するために発達した特殊構文である。

(1) **There are some books on the table.** (主語の非主題性の明示化)

(2) **Some books are on the table.** (主語の非主題性の非明示化)

(3) **Those books are on the table.** (主語 = 主題：所在文)

主語の非主題性を明示化する特殊構文は、多くの言語において見られ、また、英語以外の言語では、存在文以外のタイプの文でも成立することがある。(フランス語、ドイツ語、イタリア語、etc.)

このような非主題化構文成立の背景にあるのは、文の表す事態の概念化にあたって、伝達の焦点をどの範囲に設定するか、という、概念化主体 (Conceptualizer) の主観的選択の問題である。一般に、文の焦点設定には、全文焦点 (文全体が焦点)、述部焦点 (主題・題述関係)、特定部焦点の3つのモードがあり、英語では、標準的な文構造の場合、これらのモードは、韻律面を別にすれば、形式上特に区別されない。

(4) **John is STUDYING ENGLISH.** (全文焦点、述部焦点)

(5) **JOHN is studying English.** (特定部焦点：主語)

(6) **John is studying ENGLISH.** (特定部焦点：目的語)

但しその一方で、特定部の焦点化を明示するための様々な特殊構文が存在する。(e.g. 分裂文、倒置構文、焦点部前置化)

しかし、存在文の表現対象である「存在」という事態は、他の事態と異なる特殊性を持つ。即ち、通常の手続きでは、基本的に主語の事物の存在が前提にされているが、「存在」という事態の場合はそうではなく、主語の事物がそもそも存在するか否かということが伝達の焦点となる。そのため、存在文では、主語を含めた文全体が焦点となり、主語は必然的に非主題化されるのである。

多くの言語は、存在文のこの特殊性を明示的に反映させるための特殊構文 (非主題化存在文) を発達させており、英語の **There** 構文もその一つの例である。それらに共通する文法的特徴は、主語位置の空白化・虚辞化や主語の後置など、標準的な主語の配置からの逸脱であり、また、「主語」の特徴の曖昧化 (e.g. 数的一致の曖昧化) である。

更に、英語において **There** 構文は均一な一枚岩ではなく、**There BE** 構文、**There V** 構

文、提示の *There* 構文というふうに構文的な広がり形成しており、そのそれぞれが独特の特性を持っている。

- (7) *There are some books on the table.* (主語の存在)
- (8) *There emerged some new facts at the meeting.* (主語の出現: 存在+α)
- (9) *There lurched into the room an old man.* (主語の出現+談話空間への導入)
- (10) “*Who will join the workshop?*” “*Well, there’s John, Mary, Peter, and myself.*” (談話空間への導入)

このように、これらの変種構文は互いに差異を有しているが、その一方で、主語の非主題化を明示化する構文であるという点では共通しているのである。

副詞節主語の特性の理論的考察

廣江 顕

副詞句あるいは副詞節は、間接疑問文の場合を除いて、一般には主語位置に生起できないと考えられてきたが、その主張には、以下(1)で例示されているように、反例が存在する(下線は筆者)。

- (1) a. *Before I arrived* isn't the time I want you to focus on. Please think about the time after I arrived.
- b. *After he finally told the truth* isn't when people began to love him. They loved him all along, despite his lies.

(1)の下線部で例示されているような事実を提示すると、統語部門において *the time* が(1a)の *Before* の、(1b)では *After* の、それぞれ前に省略されているため、(1)のような副詞節主語は、以下(2)に示されているように、DP を形成しているとの反論が予想される。

- (2) [DP [D (the) [NP (time) [CP *Before/While* ...]]]]

しかしながら、(2)における *the time* のような DP が省略されているとは考えられない事実があることを示し、本発表で提示する副詞節主語を伴う文の認可は、統語部門ではなく、稲田(2005)及び Jackendoff (1997, 2005) で提唱されているような概念構造で行われているとの主張を行い、副詞節主語が示す統語部門と概念意味部門との mismatch を「三部門並列モデル」に位置付ける試みも併せて行うものとする。

また、(1)のような例、つまり、主語位置に生起可能な副詞節主語の研究は、*subject-because* 構文の研究がその嚆矢と言えるが、

- (2) a. *Just because he is a professor of medicine at Cambridge* does not make his findings unquestionable.

(Matsuyama (2001: 331))

- b. *Just because I am a grandfather* doesn't mean that I have to settle into my rocking chair and wait to die.

(2)のような *subject-because* 構文と(1)のような副詞節主語との関連性が取り上げられた研究は、筆者が知る限り、無いようである。本発表では、それぞれの統語的・意味的特性をどの程度共通して抽出することが可能かどうかの考察も併せて行いたい。

Selected references:

稲田俊明(2005)「言語機能の特性と言語多様性－問い返し疑問文の生成と3部門並列モデル」『九州大学言語学論集』25-26 合併号, pp.113-119.

Hilpert, Martin (2005) “From causality to concessivity: The story of just because,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 11, pp. 85-98.

廣江 顕(2012)「副詞節主語の諸特性」, 日本英文学会第 93 回全国大会研究口頭
発表論文.

Jackendoff, Ray (1997) *The Architecture of the Language Faculty*, MIT Press, Cambridge,
MA.

Jackendoff, Ray (2005) *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*,
Oxford.

Kanetani, Masaru (2008) “Just because of a causal PP doesn’t mean that it cannot be a subject:
An analogical construction,” a paper presented at the 5th International Conference on
Construction Grammar, University of Texas at Austin, Austin, TX., USA.

Matsuyama, Tetsuya (2001) “Subject-*because* Construction and the Extended Projection
Principle,” *English Linguistics*, vol. 18 (2), pp. 329-355.

〈第 2 日〉 10 月 17 日 (日) 研 究 発 表

第 1 室

【招待発表】

司会 福岡大学教授 鶴田 学

1. 『ヴェニス商人』におけるポーシャの教養

志學館大学講師 高根 広大

『ヴェニス商人』において、男装したポーシャは裁判を執り行い、夫バサーニオの友人アントーニオを救う。さらには、シャイロックの遺産が、駆け落ちした娘のジェシカと夫ロレンゾーに渡るように取り計らう。ポーシャはバサーニオを夫として迎え入れる際、自分を「教養も学問も経験もない小娘」と謙遜しているが、実際のところ、彼女はどのようにしてこのような驚くべき活躍ができたのだろうか。あるいは彼女にどのような教養が備わっていたのだろうか。

初期近代イングランドにおいて、男性教育の目標が知識と雄弁術で社会や政治に参加させることであったのに対し、女性の言語教育は制限され、夫に従順な良き妻、あるいは良き母を育てることが目標とされた。また、教育におけるこうしたジェンダーの二分化は、男性優位の社会秩序を安定させると期待された。本発表では、こうした社会的コンテクストから、『ヴェニス商人』におけるポーシャの教養と、ジェンダー化された教育について考察する。

司会 熊本県立大学准教授 田中 和也

2. *A Tale of Two Cities* における特派員の語り——語り手と Alexandre Manette

の手記について

就実大学講師 原田 昂

本発表は、Charles Dickens が 1859 年に連載した *A Tale of Two Cities* において 19 世紀後半に登場した特派員の手法や影響が見られることを明らかにするものである。本作品が出版された 1850 年代には、特派員が新しい報道手法を実践することで読者の人気を獲得した。この事実から、作品出版当時の現実世界を知る語り手が特派員の手法を用いたとしても不思議ではない。しかし本作品では、物語内部の 18 世紀を生きる登場人物 Alexandre Manette が書いた手記にも特派員の手法が見られる。例えば、両者はともに夜の散歩中に自分が見聞きしたことや考えたことを記しているが、これは Dickens によって特派員として抜擢された George Augustus Sala が用いた方法だ。また、彼らはともに絵画的な描写や地形的情報の提供によって、現実世界で特派員たちが行ったのと同様に、読者が時空を超えた旅を楽しめるようにしている。本発表では、語り手と Manette の語りを分析することで特派員の影響を確認する。

3. *Great Expectations* におけるピップの語り——隠された暴力性と無意識の自己編纂

九州大学大学院修士課程 横井 翔馬

Charles Dickens による *Great Expectations*(1860-61)は、ピップを主人公としたビルドゥングスロマンである。作中においては、ピップの歪んだ階級意識からの脱却や、かつて嫌っていた義理の兄であるジョーに対する見方の変化など、明らかなピップの成長を感じさせる。しかし、そのピップの語りに注目すると単なる成長物語とは見なせない部分が存在する。彼の語りには自己欺瞞的な側面が見られるのである。

本発表では、ピップの暴力性を取り上げながら、彼がマグウィッチの財産を相続しなかったことと結びつけ、支配からの脱却および彼の語りの目的を考察していく。ピップの人生はマグウィッチという男の影響下にあった。彼は自身の半生を振り返り、語るわけであるが、これを他者の下にある自身の人生の自己編纂であり、自身の人生の主導権を取り戻す試みであると見做せるのではないだろうか。しかし、本当にピップが他者の影響から脱却出来ているかは疑問が残る部分があり、それについても論じていく。

4. 【発表なし】

5. 【発表なし】

第 2 室 (中講義室 2)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

3. 【発表なし】

【招待発表】

司会 九州大学教授 高橋 勤

4. Capote 著 *Summer Crossing* の素材と主題 —— Capote の諸作品との関係を手がかりとして

九州国際大学教授 大園 弘

Truman Capote の死から約 20 年後の 2004 年秋、*Summer Crossing* の遺稿が発見された。サザビーズからその旨の連絡を受けた Capote の遺産管理人 Alan Schwartz らの尽力で、この中編小説は、翌 2005 年、Random House から刊行された。

遺稿が発見された 2004 年には *Capote: A Biography* (1988) の著者 Gerald Clarke により Capote の書簡集、*Too Brief a Treat: The Letters of Truman Capote* が出版された。それによると *Summer Crossing* は *Other Voices, Other Rooms* (1948) の刊行から 2 年後の 1950 年頃書き上げられたと推測できる。1943 年に着手されたこの作品は、中断の時期はあったものの、執筆開始から約 7 年後に書き上げられたことになる。

以後 50 余年にわたり、*Summer Crossing* の原稿は作者によって廃棄されたと考えられてきた。上記の書簡集にはこの作品の執筆を巡る作者の期待と苦悩が切実に綴られてもいる。だが、作者の思いがどうであれ、この遺作が読者に Capote の初期の創作活動に関する新たな情報をもたらしているのは確かなようである。

よって、本発表ではこの中編の執筆の足跡を整理したうえで、Capote の諸作品との関連性に言及しつつ、この物語の素材と主題を中心に考えてみたい。

5. 【発表なし】

第 3 室

司会 琉球大学教授 石原 昌英

1. 音節構造と母音持続時間——英語の 2 音節語の場合

福岡大学大学院修士課程 石橋 頌仁

世界の様々な言語において、音節構造によって母音持続時間は変化するというこ

が指摘されている。石橋 (2021) は英語の 1 音節語における母音持続時間と頭子音数及び尾子音数の関係を報告したが、2 音節の単語の第 1 母音の持続時間と頭子音及び尾子音数の関係については言及していない。そのため、本研究では、英語の 2 音節語における第 1 母音持続時間と頭子音及び尾子音数の関係が 1 音節語と異なるのかどうかを明らかにすることを目的として、英語母語話者に対して音声産出実験を行った。英語の 2 音節語における母音持続時間に対する分散分析及び多重比較の結果、英語の 2 音節語においても、頭子音数及び尾子音数は第 1 母音持続時間に対して影響を与えていることが分かった。また、頭子音数が増えた場合、第 1 母音持続時間は長くなり、尾子音数が増えた場合は第 1 母音持続時間が短くなるという先行研究と同様の傾向が観察された。

2. ヒーローと悪役の名称比較——*Marvel Comics* のキャラクター名における音象徴

福岡大学大学院修士課程 神谷 祥之介

音象徴の議論において、有声阻害音は無声阻害音よりも悪役の名前に選ばれやすく、また、ヒーローの名前では無声阻害音の方が有声阻害音よりも選択されやすいことが示されている。しかし、ここで示されたヒーローの名前が示す音象徴的傾向に関しては、無意味語による実験の結果に限って観察されたものであり、既存の作品中にも同様の傾向が見られるかどうかについては未だ検証の余地がある。この問題を解決するために本研究では、*Marvel Comics* に登場するヒーローのチーム「アベンジャーズ」に属するヒーローとそれに敵対する六つのグループに属する悪役（ヴィラン）として描かれたキャラクターの名前に使用されている子音を分析・比較した。その結果、既存の作品中からも無意味語を用いた実験で得られたものと同様の傾向が見られ、ヒーローと悪役の名称における音象徴的パターンには一定の差があるという事実の一般性が概ね支持された。

司会 宮崎公立大学教授 福田 稔

3. 主語 wh 疑問文の派生再考

九州大学大学院修士課程 末永 広大

本発表では、主節の主語 wh 疑問文における省略文の文法性とスコープ解釈に関わる問題を、Chomsky (2013, 2015)において展開されているラベル理論の想定では正しく捉えられないことを指摘し、TP の指定部に留まると考えられてきた主語 wh 句が CP の指定部に移動する派生を提案する。その上で、英語における *that* 痕跡効果は、音韻部門において義務的に適用される T to C 移動が *that* によって妨げられることに帰結可能であると主張する。さらにその議論を応用して、*that* 痕跡効果における通言語的差異を考察する。本発表では、数量詞遊離文の派生に関して、数量詞遊離は移動操作を伴う派生であるという立場から、その構造と派生に関して議論する。

4. Split Minimal Search

九州大学大学院博士課程 森竹 希望

本発表は Locative Inversion (LI) や *there* 構文における agreement や格付与に関する考察を行う。(1)、(2)は LI、(3)、(4)は *there* 構文を示す。

- (1) a. In the garden stand two fountains. (Levine (1989: 1015))
- b. *In the garden stands two fountains. (*ibid.*)
- (2) Under the garden wall sat I/*me. (Levine (1989: 1045))
- (3) There is/are lots of cookies on the table. (Schütze (1999: 469, 一部修正))
- (4) There is only me/*I in the garden. (Sobin (2014: 386))

(1)、(2)における LI では、T と動詞句内部にあると考えられる主語が一致をし、その主語は主格を得ることが示されている。一方、(3)と(4)における *there* 構文では、意味上の主語と T の一致は随意的であり、それは主格ではなく対格を得ていることが明らかである。一見すると LI と *there* 構文は類似しているように見えるが、agreement と格付与に違いが見られる。

本論は Agree を Minimal Search に還元した Epstein, Kitahara, and Seely (EKS) (2017, 2018)の提案を踏襲するが、EKS とは異なり、feature valuation は label に基づいて morpho-phonological component で行われるのではなく、あくまでも narrow syntax で行われると提案する。さらに、Holmberg and Sigurðsson (2008)の提案を鑑み、Minimal Search は[Person]と[Number]で独自に行われると提案し、上記の事実を説明する。

5. 【発表なし】

第 4 室

司会 産業医科大学准教授 田中 公介

1. ラベリング分析における動詞句の派生

九州大学大学院修士課程 宮元 創

本発表では、Chomsky (2013, 2015) で提案されたラベリングアルゴリズムの枠組みで主語と目的語の対称性が捉えられないことを指摘し、新しい分析方法を示すことを目的とする。

主語と目的語は抜き取り、重名詞句倒置などの様々な文法現象において差異が生じる。

- (1) a. *Who did [stories about _] terrify John? (Chomsky (1973: 249))
- b. Who did you hear [stories about _]? (*ibid.*)
- (2) a. **t* are happy [all of the men who recovered from mono-nucleosis]. (Nishikawa (1990: 17))
- b. He attributed to a short circuit [the fire which destroyed most of my factory]. (Nishikawa (1990: 15))

(1) と (2) の文はそれぞれ主語と目的語における抜き取り、重名詞句倒置を表すが、主語の方が目的語より制限がある。しかしながら、ラベリングアルゴリズムにおける CP と v^*P の派生は並行的に捉えられているため主語と目的語の対称性を予測することができない。本発表では T と R の強化方法が異なることを提案し、その強化方法の差異によって主語と目的語の対称性が捉えられることを示す。

さらに、本発表では Chomsky (2015) のラベリングアルゴリズムの枠組みにおいて v^* のフェイズ性の捉え方には問題が残ることを指摘し、その問題の解決方法を示す。

司会 九州共立大学准教授 黒木 隆善

2. 英語の二次述語構造のラベリングについて

九州大学大学院博士課程 久保田 舞

本発表では、英語における二次述語の統語的派生を、ラベリングアルゴリズムの枠組みを用いて提案する。また、特に三種類の二次述語の wh 移動の可能性の差異は、痕跡のみから成る {trace, trace} 構造の存在と関与していると議論する。具体的には、二種類の叙述の二次述語の wh 移動の容認性は結果の二次述語と比較して低下する要因は wh 移動後の構造内の {trace, trace} 構造が、ラベル未決定のまま SM/C-I インターフェースに転送され、うまく解釈がなされないことにあると提案する。また、このような {trace, trace} の構造がどの程度文法性を低下させるものであるかについても検討し、目的語指向叙述の二次述語と主語指向叙述の二次述語間の wh 移動の可能性の違いも説明づける。

司会 長崎大学教授 廣江 顕

3. 概念構造からの anaphor と logophor への統一的アプローチの試み ——文と文断片の self 代名詞

長崎総合科学大学講師 永次 健人

本発表では、Jackendoff (1990)などで提案されてきた概念構造における束縛を発展させて、英語の self 代名詞が anaphor、logophor の両方として振る舞う事実の統一的説明を試みる。具体的には、次のことを論じる。

- 英語の self 代名詞は束縛条件 A に違反し、logophor として振る舞うことが可能であり、Reinhart and Reuland (1993)などでは、self 代名詞は項であるときのみ anaphor となり、それ以外のときには logophor となるという一般化が示されている。概念構造 (Conceptual structure: CS) における束縛という観点から、self 代名詞が anaphor であるときと logophor であるときを統一的に扱える。
- また、文断片において、self 代名詞が局所性制約を受けない事実は、Reinhart and Reuland (1993)の分析にCSにおける束縛を組み合わせることで予測できる。

4. 英語の Negative Concord に関する研究 ——標準英語・非標準英語における NC/DC の統語構造の解明

九州大学大学院修士課程 崎向 悠太

英語の否定調和 (Negative Concord : NC) は通例非標準英語にみられる、特異的な文法現象である。標準英語の二重否定 (Double Negation : DN) では、2つの否定表現が共起するとお互いの否定の意味を打ち消し合い、肯定の意味解釈を得る。一方 NC では、2つ以上の否定表現が共起しながら、一つの否定として解釈される。英語においては文法性の容認度が分かれるが、West Flemish やロマンス語などの言語では明らかに文法的である。しかしながら、古英語や中英語では標準英語においても NC が文法的であるという事実もみられる。英語及び他言語の NC/DC の対比により分析を行うことは、英語の否定文の統一的な分析を可能にするかもしれない。

本発表では、文断片の例から示されるように、Negative Concord Item (NCI) が固有に否定の意味を持つ。それは解釈可能な否定素性 ([iNeg]) を持つと同時に、解釈不可能な focus 素性 ([ufoc]) を持つと想定する。その上で、NCI の解釈を生み出すメカニズムと英語におけるその可能性の変異のメカニズムを考察する。

【招待発表】

5. 素性浸透アルゴリズムの意義と展開

福岡工業大学教授 宗正 佳啓

本発表は、言語の普遍的特性と言語間差異を原理的に説明できる文法理論を構築する上で有用になるであろう素性浸透アルゴリズムを提案する。特に、Chomsky (2008) 以来の素性継承という概念を発展させ、 ϕ 素性等の特定の素性は類型論的に異なる諸言語の調査により導き出した CP 領域内に生起する MoodP から T に継承され、その反作用として分散形態論において素性が T から Fin へ素性浸透 (feature percolation) が生じるという仮説のもとに素性浸透アルゴリズムを構築する。素性浸透アルゴリズムは ϕ 素性だけに限定されず他の心態の表現 (mood) に関する素性にも適用、応用される。この応用によりゲルマン系言語に多く観察される補文標識の一致現象とその言語差異、英語の動名詞句の通時的変遷、日本語の心態の表現に関する通時的変遷等が原理的に説明でき、その拡張性、汎用性を示していく。

特別講演

演題 孤立と連帯

講師 作家 沼田 真佑 (ぬまた しんすけ)

司会・聞き手 西南学院大学教授 藤野 功一

聞き手 西南学院大学教授 ユスチナ・W・カシャ

講演内容

このところ、小説を読むこと、また小説について考えたり、誰かと話し合ったりすることが、書くという行為とほとんど同質の行為のように感じられてなりません。一方で、自分が書く文字の、それぞれの活字が発する「声」のようなものを、持て余すようにもなってきました。これは文字というものが、つまるところ他者に通じるものだからではないかと思います。言葉を通じて、現実中存在する何ものかと、たとえ仮初のものにもせよ、結び合うことは可能なのかというふうなことを、すこし考えてみたいと思います。

講師紹介

1978年北海道小樽市生まれ。その後、神奈川、千葉、埼玉、福岡、岩手、宮城と転じる。仙台市在住。2017年、小説「影裏」で第122回文学界新人賞受賞、同作品で第157回芥川龍之介賞を受賞。他に小説では、「廃屋の眺め」(『文学界』2017年9月号)、「夭折の女子の顔」(『すばる』2018年1月号)、「さくれぶる」(『すばる』2018年5月号)、「陶片」(『文学界』2019年1月号)、「早春」(『群像』2019年9月号)、「茨の実」(『すばる』2020年5月号)、「入船」(『群像』2020年8月号)、「遡」(『群像』2021年2月号)、「於浅虫」(『すばる』2021年4月号)、「ブラスト」(『群像』2021年8月号)を発表。エッセイは、「盗癖」(『すばる』2017年8月号)、「馬」(『すばる』2017年9月号)、「わたしの楽園」(『群像』2018年11月号)、「特集 本を読む」(すばる2019年1月号 アンケート)、「読書日録」(すばる2019年4月号)、「続 横道世之介」(文学界2019年5月号 書評)、「読書日録」(すばる2019年5月号)、「読書日録」(すばる2019年6月号)、「シネマ 2019」(群像2020年2月号 アンケート)、「近く、遠いまなざし」(文学界2020年2月号)、映画撮「影裏」話(文学界2020年3月号)などを発表。著書に『影裏』(文藝春秋、2017年7月/文春文庫、2019年8月)がある。